

小山俊樹著

『五・一五事件 海軍青年将校たちの「昭和維新」』

十 河 和 貴

はじめに

五・一五事件は、一九三二年五月一日に海軍青年将校を中心に引き起こされた軍事テロである。これにより時の首相犬養毅が暗殺され、その結果八年間継続してきた「憲政常道」の慣例、すなわち戦前日本の政党政治に終止符が打たれることとなった。また、この直接行動は二・二六事件（一九三六年）への導線となり、戦争拡大へと続くレールを敷設していく起点ともなった。それはやがて大日本帝国憲法下の政治体制そのものを葬り去る結果を招く。

このように、五・一五事件は歴史的にみてきわめて重要な転換点となった。それゆえ研究史ではごく自然に、事件を引き起こした主体以上に、それにより生じた政治変動へと関心が集中してきた。しかし、なぜテロは起こったのか、という根本的な問いを前提に置かなければ見えないものもある。本書は、これまで十分光があてられてこなかった、五・一五事件の首謀者に視点を定めることでこの問いに回答し、かつ豊富な知見・論点を提起している。

一 本書の内容

まず、本書の構成は次の通りである。

- 第一章 日曜日の襲撃——一九三二年五月の同時多発テロ——
- 第二章 海軍将校たちの昭和維新——国家改造と軍縮条約——
- 第三章 破壊と捨て石——クーデターからテロリズムへ——
- 第四章 議会勢力の落日——何が政党政治を亡ぼしたか——
- 第五章 法廷闘争——なぜ被告は減刑されたか——
- 第六章 さらに闘う者たち——元受刑者たちの戦争と戦後——

まえがきでは、①海軍青年将校たちはどうして事件を起こしたのか、②なぜ政党政治は終わったのか、③なぜ国民の多くが青年将校たちに同情し、減刑を嘆願したのか、という三つの課題が掲げられる。そしてそれぞれの課題に対応して各章が構成されている。以下、各章ごとに内容をまとめていきたい。

まず第一章では、冒頭にもかかわらず五・一五事件当日の様相が子細に描かれる。本書の構成のなかで、本章だけは先に掲げた課題のいずれにも対応していない。そのかわり本章には、読者にある疑問を抱かせるといふ重要な役割が課されている。

本章へとページを進めたとき、いま読んでいるものが、歴史学の新書であることを疑った読者も多かったのではないだろうか。それは、あたかも小説のクライマックス・シーンを彷彿とさせる描写であり、臨場感あふれるトーンで事件の様相を描いた叙述に、我々は引き込まれるのである。ただし、それは小説のクライマックスとしてはいささかふさわしくない。なぜならば、主人公ともいえる三上卓が犬養毅首相を拳銃で打ち抜くという劇的なシーン

の後には、あまりにも計画性のない犯行が露わとなり、内大臣官邸や変電所の襲撃失敗の末、さしたる抵抗もなく憲兵隊に連行されるという、実に物足りない結末を迎えるからである。

この冒頭における鮮やかな、しかし違和感を覚えずにはおけない叙述により、読者は自然と一九三二年五月一日の犯行現場へと引き込まれるとともに、一般にイメージされるそれとはあまりにかけはなれた事件の実態を知らされることとなる。そこで生じる疑問は、なぜこのように杜撰なテロが、政党政治を終焉させるほどに歴史を大きく変える大事件となったのか、という点に集約される。そしてこれらの疑問は、第二―第六章を読むことを通して解消されていく。

第二章では、①海軍青年将校たちはどうして事件を起こしたのか、という論点に対する回答が示される。主要因は三点である。第一に、青年将校らの指導者・藤井斉の思想的背景が挙げられる。藤井が海軍兵学校に入学する直前、ワシントン海軍軍縮条約が調印され、政党政治の発展を支える国際協調体制に日本は本格的に組み込まれることとなった。しかし藤井のような青年層にとって、それは海軍の未来を絶たれたと思わざるをえないものでもあった。これを契機に、藤井はアジア主義的思想に傾倒し、北一輝・西田税・井上日召・権藤成卿といった革命思想家と交流を深め、「昭和維新」の断行に思いを巡らせることとなる。第二に、浜口雄幸内閣の施政方針である。天皇・宮中の支持を背景として、ロンドン海軍軍縮条約の調印を「強行突破」する姿勢は、一面からみれば政党内閣の「強さ」を象徴するものである。だが一方で、反対論を力技で押し切る政治は、革命派を刺激するにあまりあるもの

でもあった。この不満は、浜口内閣の施政が妥当性を失ったとき、一気に噴出することとなる。これと交差する第三の要因が、世界恐慌にともなう農村不況の深刻化であった。農村における惨状は、出身の陸軍兵士たちにとって郷里の崩壊を意味する。だが、井上準之助蔵相は失業救済に理解を示さず、金解禁政策に固執し続けた。青年将校が事件を起こすにいたる背景として、浜口内閣の施政は重要な「動機」となったのである。

第三章では、青年将校によるクーデター計画の変遷が検討される。当初、「昭和維新」の断行を目指した藤井斉は、「陸、海、国民、の三軍の連絡」の合同クーデターによる「国家の改造」を構想していた。なぜなら、もしいづれが一勢力（特に陸軍）のみの力でクーデターを引き起こした場合、その結果としての「革命」は、「天下乗とりで、維新ではなく」（八五頁）なり、単なる政変以上の意味は持ちえないからである。だが、三月事件から十月事件へといたる革命計画は失敗に終わる。「維新」を成し遂げるには、右派陣営の大同団結が不可欠であったが、それは同時に革命思想家個々の志向性の相違を浮きぼりにするものでもあった。また、革命思想に対する官憲の警戒は嚴重となり、計画は規模縮小を余儀なくされる結果となったのである。それでも藤井は、あくまで大規模クーデターを構想し続けた。だが、海軍と井上日召一派は陸軍との提携を断念し、失敗を前提として国家革新のための「捨て石」となることを決断していく。さらに、指導者・藤井の死により、「昭和維新」構想の縮小は決定的となった。第四章では、なぜ縮小されたはずの「捨て石」計画が、政党政治の「破壊」にまで拡大する意味をもったのが明らかとなる。

そこで、森恪・木戸幸一・西園寺公望という三人のキーパーソンが取り上げられる。まず森が最も重視したのは、「いかに軍を抑えて、手綱を引くか」(一三六頁)であった。だからこそ森は「憲政常道」路線に無理には拘泥せず、様々な形で政権獲得工作を練り広げていく。だが、「政軍」の結合を目指した森の画策は、かえって両者の衝突を招くこととなった。一方で、直接首相選定を担う元老・宮中側近も動揺していた。木戸幸一内大臣秘書官長は、すでに党益を優先する政党では軍部を抑えられないと判断し、斎藤実挙国一致内閣擁立を提案する。他方元老西園寺は、依然「憲政常道」の慣例に則り、鈴木喜三郎政友会総裁首相説を妥当と考えていた。だが、五月十九日を契機に、挙国一致内閣奏薦へと「変心」する。著者はこの背景に、昭和天皇の意向をみる。すなわち、一九日西園寺に伝えられた「天皇の希望」が、鈴木内閣の再考を迫るものであったため、「変心」したというのである。こうして政党政治は終焉したが、それはただちに「捨て石」を「破壊」にまで広げるものではなかった。現状維持を基調とする斎藤実挙国一致内閣は、依然青年将校らに対峙する「厚い壁」であったのである。

第五章は、③の課題に対応している。五・一五事件の裁判をめぐって、国民から熱狂的な減刑嘆願運動が展開されたことは、政党の時代から軍部の時代への転換を象徴するものとされてきた。たしかに、青年将校・三上卓の供述は減刑嘆願運動を呼び起こす契機となり、国民世論の同情を喚起した。しかし著者は、在郷軍人の活動や陸軍によるメディア・キャンペーンなど、嘆願運動の背後に見え隠れする陸海軍部の動向に注目する。また、国民の運

動は事件の判決にあくまで間接的な影響しか及ぼさなかったという。むしろ最終的に下された減刑判決は、ロンドン海軍軍縮条約に起因する海軍内部の政治闘争が直接的要因であった。本章で強調されるのは、「昭和維新」断行への「捨て石」たらんとした青年将校らの意図が、権力掌握を目指す陸海軍部の政治進出を正当化させるための根拠として利用されたことである。昭和維新運動は、首謀者の意思とは異なる次元で影響を及ぼすこととなった。

このように彼らの意思が未完であったからこそ、第六章の主題は「さらに闘う者たち」となる。出所後の三上卓は、近衛文麿のいわゆる近衛新体制運動を舞台に、政治と深く関わることとなった。これは、日中戦争が長期化するなかで、強力な政治力と国民組織化の推進を目指したものであり、三上は近衛と接点をもつことで政治的発言力を得る。だが三上にはある苦悩があった。すなわち、もし革新右翼が求めるような「一国一党」体制となった場合、それは天皇に代行して権力を掌握する「幕府の樹立」と同義となり、自らの昭和維新運動の精神に根本的に反することとなりかねないというジレンマである。では、三上らの昭和維新運動とは結局何であったのか。それは、「天皇と青年が目的を同じくして、ともに歩んでいく。それは国内の激烈な社会格差、そして特権階級の横暴を憎んできた三上ら維新勢力の希求する日本の理想形であった」(一三五頁)。それゆえ三上は戦時下においてもなお、「幕府」内閣たる東条英機首相暗殺計画に関与していく。戦争を経て三上の闘争は途絶えることはなく、その維新運動の精神は、彼の死をもってしか終結しえなかったとして本書は締めくくられる。

二 本書の成果

すでに首謀者側の視点も含めた全体像が明らかにされてきた二・二六事件に比して、五・一五事件は、歴史上に与えた影響とは対照的に、事件そのものに対する研究が著しく遅れてきた。これに対し本書は青年将校を分析の主軸に据えることで、事件までの経緯を明らかにするに留まらず、事件公判から戦後にいたるまでも視野に入れた長期的視点を提供しており、この点ですでにゆるぎない価値がある。さらに、政治家や陸海軍首脳部など体制側の動向にまで注意が払われ、時代に並行した青年将校の動向が多角的な視座から照射されている。青年将校の主観的思想を丁寧に紐解き、時々の感情を子細に浮かび上がらせつつも、そこに一貫した行動原理を見抜く優れた分析は、豊富な論点を提供している。特に、山本孝治検察官が被告側を全面的に論破する論告を陳述したにもかかわらず、海軍の政治力学によって封じ込まれていく様相は、従来過剰に高く評価されてきた減刑嘆願運動に対する新しい見方を提示するものである。これは、政党政治崩壊以後の「国民」の動向を考えるうえで、きわめて参考になる考察であろう。さて、本書の成果の中で評者が最も重要だと考えるのは、政党政治との関係に過度に捉われず、五・一五事件を描き直した点である。従来の研究は、事件が政党政治の終焉という政治構造の変容に及ぼす影響をもたらしたのか、という論点に関心を集中させてきた。それゆえ事件そのものや首謀者の意図といった視点は、副次的に取り上げられるに留まっていた。それに対し本書では、青年将校に焦点を絞ることで、政党政治の崩壊という断絶よりも、

事件前後における運動の連続性を意識的に示している。

実は本書において、青年将校が政党政治の体制をいかに見ていたかを語った部分はそう多くはない。むしろ本書で注目されるのは、彼らの犯行にいたる「動機」が、政党政治という政治体制そのものよりも、浜口内閣期の農村不況やロンドン軍縮条約など、その具体的政策に見出されることである。青年将校の「下らぬ代議士などやつつけても駄目だ」（一九頁）という発言は、まさに政党自体が彼らの眼中になかったことを物語っているといえよう。青年将校らにとって、「天皇の意思」を独占する特権階級は、政党であろうが官僚であろうが同一であった。すなわち、陸・海・民一体となって「幕府」の存在を葬り去る「昭和維新」を目的とした彼らの視点からみれば、政党政治の崩壊などは単なる通過点に過ぎなかったということを本書は示している。

政党政治に対する軍部の挑戦、という構図で語られることの多い五・一五事件だが、こうした視点からみれば、三上が東条内閣打倒を目指したことに象徴されるように、軍部が政党に取って代わるような状況もまた彼らの忌避すべき対象であった。この壮大な「昭和維新」を目標に掲げたがゆえに、大規模なクーデター計画は失敗を余儀なくされ、「捨て石」作戦に縮小せざるをえなかったという論理展開は実に説得的であった。

むしろ、青年将校の視点から描かれる本書において、唯一「対峙する厚い壁」と表現されているのは、政党政治ではなく斎藤実挙国一致内閣である（一六五頁）。それゆえ、青年将校は最後まで「さらに闘」わなければならなかった。このような表現の節々から垣間見えるのは、五・一五事件が決して彼らの思惑通り成功

したものではなく、政党政治の終焉とテロを分けて考えなければならぬという、旧来の歴史像に大きな修正を迫る論点である。

三 本書の疑問点

しかしながら、本書が政党政治の崩壊に捉われない五・一五事件像を提示したからこそ、従来の研究では問われてこなかった新たな問題が浮上してくるのではないだろうか。そしてそれは、本書に対する疑問点となる。本書は、首謀者の意図が政党政治の破壊そのものではなかったことを示した。とはいえ客観的にみれば、本事件がもたらした最大の変動は政党政治の終焉である。政党政治の崩壊を紐解く重要な成果を挙げてきた著者であるがゆえに、改めて本問題に焦点を絞り、いくつか疑問を提示していきたい。

いま一度本書の論点を整理しよう。なぜ政党政治は終焉したのかという課題に対して著者は、首相選定の決定権を握る元老西園寺公望が、昭和天皇の「希望」を受け入れたからであると説明する。そして前著「憲政常道と政党政治」の成果も踏まえれば、そうした昭和天皇の意向の背景には、「党利党略」に明け暮れる二大政党の対立があったことが浮かび上がる。著者の回答は明快である。しかし、改めて本書の主題に照らし合わせると、この理解に対して二点の疑問が生じた。

第一に、テロにより政変が生じた場合における西園寺の首相選定の論理は、「憲政常道」とは異なる次元で理解する必要があるのではないかという点である。西園寺は、原敬が暗殺された直後に同じく政友会総裁の高橋是清を奏薦した理由について、「首相を殺せば如何なる場合にも、其内閣が潰れるといふ悪例を胎すべ

きにあらざ」と振り返っている^②。ここには、直接的暴力の否定という、政党政治の継続とは異なる論理が働いていることがうかがえる。逆にいえば、五・一五事件における西園寺の「変心」には、テロを肯定しかねない危険性が包含されていたと理解できよう。

そもそも著者は、「首相がテロや病氣などで辞任する場合は、同じ政党の後継総裁が首相になること」（二四〇頁）を、「憲政常道」のルールとし、テロと病氣を同一線上に並べるが、これは妥当であろうか。たとえば、西園寺は、浜口内閣の後継に第二次若槻礼次郎内閣を奏薦したことについて、「殊に濱口総理大臣の辞職は病氣とは云へ、其の原因は政治的の意味を含む暗殺にして、之が原因となり総辭職を為すが如きは、暗殺を奨励するが如き結果ともなり、由々敷ことなり」とその理由を述べている。つまり、彼自身、テロを否定する点に、病氣の場合とは明確に異なる意義を見出していたのである。それは直接暴力に基づく政治的変動の否定であり、しかもこうした志向は、「憲政常道」のルールが確立する以前にあたる原敬暗殺時に遇れることにも留意しておきたい。すなわち、「憲政常道」のルールに先立つ論理だったともいえる。

このように考えたとき、いかなる理由にせよ、テロすなわち直接暴力による政権交代を西園寺らが「容認」したことには、政党が政権を喪失した以上の意味を見出せるのではないか。もちろん著者がいうように、二大政党の党首が交互に政権を担当することや立憲政治のあり方とする「憲政常道」は、二大政党の統合力・政権担当能力が問題視されれば動揺せざるをえなかった。西園寺にとって「憲政常道」は、すでに「天皇の希望」（以下「希望」）

を振り切つてまで固執すべきものではなかったという主張もまた首肯できる。しかし、その崩壊をテロがもたらしたということがはらむ問題は、「二大政党制」の崩壊以上に重要だったのではない。本書で解明されたように、五・一五事件が青年将校の壮大な政治的意思表明を意味するものであったならばそれはなおさらであろう。実際西園寺が危惧した通り、一九三〇年代において政治テロが横行し、二・二六事件にまでつながるといふ歴史的結果を考えたとき、いかなる論理で政党政治（ある政治体制）が崩壊したにせよ、それを直接導いたのがテロであった事実こそ重要なのである。この点を等閑視すれば、直接的暴力を肯定するか否かという問題の重要性を埋没させてしまうことになるのではないだろうか。

これとも関連して、本書の課題①と②を異なる分析視角から解明したことで第二の疑問が生じる。すなわち、五・一五事件をテロ実行側の主張に力点を置くだけではなく、それを受け止めた体制側の理解として複眼的に捉え直す必要があるのではないかという点である。本書によれば、青年将校がテロを引き起こした理由は、政党政治への批判よりも、第一次世界大戦以降の国家改造運動に端を発していた。それに対し、政党政治が終焉した要因は、「党利党略」にふける二大政党政治に対する天皇・宮中の不信任感であったと説明される。しかし、果たしてこの二つの論点は分離させたままでよいのだろうか。これは決して、青年将校の主観を明らかにした本書の成果を否定するものではない。むしろその成果があるからこそ、ここでさらに問われるべきは、事件をめぐる複層的主体による、主観の相違である。

木戸幸一が「眼界の狭き偏見と独断に驚く」（二〇〇頁）との感想を洩らしたことに象徴的に表れているように、青年将校はあくまで主観的判断に基づいて事件を引き起こした。だからこそ、首謀者側の主観をメインに取り上げた本書の成果は際立つ。しかし一方で、事件を受け止めた体制側もまた同時に、事件を主観に基づいて解釈したのではないだろうか。つまり、昭和天皇や西園寺が事件をいかに受け止めたかは、重要な問題である。

もともと、天皇や元老個人に限定してこのことを考えようとすれば史料上限界があるろう。ただし、考えるヒントは残されている。村井良太が言及しているように、「希望」の根拠となったと思われる木戸幸一の「時局收拾大綱」は、五・一五事件で配布された文書を受けて作成されたものであった。いわゆる、三上が書き上げた「檄文」（一一七頁）である。本書が描く通り、テロの真の目的は、政党政治の破壊以上に支配体制そのものの変革であり、「幕府」の否定であった。「檄文」は、既成政党のみならず「君側の奸」、財閥、官憲、特権階級を「破壊」すべく、民衆の奮起を促している。

しかしこれを読んだ木戸は、「政党並に側近は腐敗し居るを以て、現状を打破し、堅固なる組織をなすの要ありとの意味のものだ」と解釈している。つまり木戸は、五・一五事件の目的を、自分自身が抱えていた政党政治に対する不満が発露したものであると主観的に理解したのである。「時局收拾大綱」では、「本事件の如き妄動に等しき直接行動により国家の大本を揺せ之に引づらるるが如きは厳に避くるを要す」「明治大帝の御治定相成たる欽定憲法並に五条の御誓文の精神に背かざることを期し、之を目標と

して、総てを案画すること」などであり、明確にテロの真的「目的」を否定している。要するに木戸は、青年将校の直接行動が支配組織自体の「破壊」を目指したものであることを見抜いたうえで、政党政治を批判し、より「堅固なる組織をなす」ことを主張したものとこれを読み換え、斎藤実挙国一致内閣を提唱したのである。

こうした両者の主観の相違は、その後の歴史にどのような影響を及ぼしただろうか。第一の疑問点と照合して考えれば、テロの行動は部分的に「容認」される形式となつたにもかかわらず、その結果としてテロの目的とは正反対の政権が出現したこととなる。こうしたズレは、体制側が想定する以上に、さらなる「革命」志向を加速させることになるだろう。このように様々な想像を掻き立てられるがゆえに、いま一度五・一五事件が歴史上に与えた影響の大きさを問い直す必要があつたように思われる。

おわりに

以上の論点は、政党政治の崩壊という視点に偏つていた研究史に対して、青年将校の主観を対置させて明らかにすることではじめて浮かび上がる。その点において、青年将校の思いに徹底的に寄り添い、彼らの行動原理を示した本書の功績はさわめて大きい。すでに多くの研究が蓄積されている政党政治の崩壊およびそれ以後の政治史において、本書が提示した論点が、新たな歴史像を組み立てていく嚆矢となることが期待される。

以上、的外れな指摘や誤読もあるかと思われるが、これも本書で示された新規性に触発されるところが大きかつたためであり、

著者と読者のご海容を請いたい。それにしても、本書がすでに多くの一般読者を得ていることは、その価値と著者の力量の大きさを象徴的に示している。臨場感あふれる叙述、親近感を覚える文体、根源的問いの設定と明快な回答、いずれをとつても読者の近現代史に対する知的好奇心をくすぐるにあまりあるものである。研究史上の発展のみならず、本書が今後、歴史学の成果を社会に還元していくための模範となることを祈念してやまない。

① 小山俊樹『憲政常道と政党政治』（思文閣出版、二〇一二年）、同『評伝森恪』（ウェッジ、二〇一七年）。

② 『坐漁荘日記』一九二六年一月六日条（小泉策太郎『小泉三申全集第三巻 随筆西園寺公』（岩波書店、一九三九年）三六五頁）。

③ 木戸日記研究会編集校訂『木戸幸一日記』上巻（東京大学出版会、一九六六年）七二頁。本史料および後掲に引用した史料に記載した傍点は、評者が付したものである。

④ 村井良太『政党内閣制の展開と崩壊』（有斐閣、二〇一四年）二〇七頁。

⑤ 前掲『木戸幸一日記』上巻、一六二―一六五頁に基づく。

（新書判） vii+二八六頁 二〇二〇年四月
中央公論新社 本体九〇〇円＋税
（立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程）